PDF Complete
Your complimentary use period has ended. Thank you for using PDF Complete.
Click Here to upgrade to Unlimited Pages and Expanded Features

松原泰道（「南無の会」会長）

古代インドの地方語のパーリ語に「カタンニュー」という言葉があります。「何がなされたかを知る」という意味です。

また、中村元先生は『仏教語大辞典』で、「恩とは、何がなされ、今日の状態の原因は何であるかを、心に深く考えることである」と解説されました。私は仏教でいう恩の基は、このカタンニューではないかと思っています。

恩という字は「因」と「心」から成り立っています。原因を知る心、つまりカタンニューです。

釈尊は、このようなたとえ話をされました。

ある金持ちが大工さんに「二階建ての家を建ててくれ」と命じた。

大工さんが一階を作り始めると、その金持ちは、「オレは一階はいらん、二階だけでいいのだ」と怒った……と。

そして釈尊は「この金持ちのことをどう思うか」と弟子たちに問いかけられたのです。

私は、それこそカタンニューではないかと思います。一階があってこそ二階があるのでしょう。そうでなければまぼろしの空中楼閣です。

私は朝日カルチャーセンターの講師をしているので、毎週一回東京の新宿住友ビルの４８階にある教室に行っていますが、ある時ふとカタンニューに思いが至りました。

すばらしい眺望のこの４８階も、その下に４７階があるからこそ実在する。そうであれば、４７階以下の存在を知るということこそカタンニューということであり、恩ではないか……と。

仏教でいう恩とは、自分よりも上の人に対するだけではなく、「自分になされたのが何であるか」という、むしろ自分より下の者のことを思うということなのです。カタンニューとは、儒教的な「上から下への」恩だけではなく、横の恩、下の恩を知るということでもあります。多くの人たちに自分が支えられていることを知る――それが恩を知るということでもあるのです。

＊　＊

そのことを、少し角度を変えて述べてみましょう。

有島武郎の『惜しみなく愛は奪う』の一節に「子を持って知る子の恩」というくだりがあります。

よくいわれる「子を持って知る親の恩」ではなくて、まさに「子の恩」なのです。自分の子供の恩を知る人にして、初めて親の恩がわかるということではないでしょうか。

実際に、サラリーマンに何かあった時、自分を支えてくれるのは上司ではなく、部下である場合も多いのではありませんか？

部下の恩がわかるのがよい上司、弟子の恩がわかるのが、すぐれた師ということになるでしょう。見定めた人物だったと思います。